

「あやしい絵展」

2021年3月23日（火）～2021年4月24日（土）¹⁾

東京国立近代美術館

国際ファッション専門職大学 河西瑛里子

1 平仮名で「あやしい」

「あやしい」と読む漢字は3つある²⁾。見慣れた「怪しい」、時々見かける「妖しい」、そして滅多に見ない「奇しい」だ。

「怪」は「心(忄)」と土地の神の象形である「土」と右手を表す「又」から成る。触れてはいけない土地の神の上に右手を置き、異常な心理状態となることを表す。信用できず疑わしい、不思議だ、珍しいといった意味で、幅広く使われている。

「妖」の隣の「夭」は、髪を振り乱した巫女の象形「𠂔」であり、女性の姿態の1つであることから女偏が付いた。艶めかしく艶やかな様、化け物や物の怪などの存在、災いを意味する。

「奇」の冠である「大」は、両手両足を広げて立つ人、「可」は鉤型に曲がることを表し、2つあわせて変人を意味する漢字だ。「怪」と同様、不思議だ、珍しいという意味だが、稀にしか見ない貴重な現象に対して使われる。

「アヤシイ絵」と聞くと、多くの人の頭の中では「アヤシイ」から「妖しい」に自動変換されると思う。本展の英語のタイトルも *Ayashii: Decadent and Grotesque Images of Beauty in Modern Japanese Art* (近代日本画にみる頹廢的でグロテスクな美のイメージ) なのだから、やはり「妖しい」に近いような気がする。しかし、タイトルは「あやしい」と平仮名のままだ。

近所で初めて、この展覧会のポスターを見

たとき、なぜ「あやしい」は平仮名なのだろうと思った。そこで本稿では、内容について紹介をした後に、なぜ平仮名の「あやしい」が使われているのかを考えてみたい。

2 「あやしい絵」の概要

本展で紹介されているのは、幕末から昭和にかけて制作された、おもに日本の画家による作品である。過去に催された類似の展覧会に、「魔術／美術——幻視の技術と内なる異界」³⁾があるが、半分以上が海外の作品であった点が本展と異なる[中村・中西 2012 参照]。以下、内容を紹介していく。

「1章 プロローグ 激動の時代を生き抜くためのパワーをもとめて(幕末～明治)」では、艶めかしい美人画、妖怪や地獄、流血などの凄惨なシーン、本物以上に本物らしい生人形などが紹介される。不安定な社会や繰り返される災害の中で、庶民はこのような非日常的な主題の作品を目にして、日常の不安を忘れ、楽しんだ。作り手の側も、世の中の流行に合わせるだけでなく、中国やオランダからもたらされた、新しい表現方法も取り入れて、作品を生み出していった。

「2章 花開く個性とうずまく欲望のあらわれ(明治～大正)」では、日本が西洋近代化していく時代の作品が取り上げられる。当時の日本の作家たちは、西洋美術を取り入れるだけでなく、日本独自の美術を生み出そうと、伝統文化に目を向けていた。本展の中心となる本章は5つに分かれている。「2章-1

愛そして苦惱——心の内をうたう」では、個人の感情を文字に頼らずに視覚的に表した作品と、当時の日本人芸術家が刺激を受けたアール・ヌーヴォーやラファエル前派の絵画が紹介される。続く「2章-2 神話への憧れ」で紹介される作品は、西洋美術を取り入れながら描かれた『古事記』や『日本書紀』の話、日本の歴史上の人物や出来事を主題としている。泉鏡花や谷崎潤一郎などの小説家による幻想文学の挿絵を取り上げるのが、「2章-3 異界との境^{はざま}」である。これらの作品には、西洋の世紀末美術やラファエル前派を含む象徴主義の美術の影響が見られる。そして「2章-4 表面的な「美」への抵抗」では、明治期末に出回った大衆的な美人のイメージに抗するような女性たちを描いた作品が紹介され、「2章-5 一途と狂気」では、顔の表情や手指の動きなど微細な部分の描写から内面を描こうとした作品が取り上げられている。

「3章 エピローグ 社会は変われども、人の心は変わらず（大正末～昭和）」は、知識層が増加し、モダン・ガールやモダン・ボーイが登場した時代の作品である。当時、流行した「エロ・グロ・ナンセンス」（「人間の性的な美しさ」「飾り気がなくて面白い」「風刺性のある馬鹿げたこと」）や都市文化のモダンさが見られる。

3 「あやしい」のは女性たちだけか

会場を訪れると、描かれている対象のほとんどが女性だということに気づく。「あやしい」のは女性だけなのか、と言いたくなるほどに。その理由として、『あやしい絵展[図録]』のコラムでは、①日本における「美人画」の系譜、②西洋の「宿命の女（ファム・ファタル）」像の流入、③画の主題となる物語での女性の立場、④マスメディアがつくる女性像、の4点を指摘している（本展の図録中のコラム128ページ）。

②のファム・ファタル像は、欧米の現代の

魔女と関係している。ファム・ファタルの原語はフランス語の *femme fatal* であり、宿命の女、運命の女と訳される。19世紀末に登場した女性像の1つで、男をとらえ、破滅させるという、誘惑と悪徳と極楽の権化として捉えられている〔海野 2014: 67〕。

ファム・ファタルは新たな魔女のイメージだったともいえる。魔女狩りが行われていた時代、魔女は悪魔のしもべであり、性的な魅力で男性を惑わす邪悪な存在とされていた。この「邪悪」という意味は、触れることすら忌避され、浄化するためには火あぶりにしなくてはならないというほど苛烈だ。魔女狩りは17世紀後半には終わるのだが、それから100年ほどが過ぎた18世紀末から19世紀前半にかけてのロマン主義の時代、魔女への関心が高まっていく。19世紀末には、神話などの中で魔女とみなされてきた女性が絵画の主題として取り上げられていく。たとえば、『リリス』（ジョン・コリア、1887年）、『メディア』（イーヴリン・ド・モーガン、1889年）、『オデュッセウスに杯を差し出すキルケ』（ジョン・ウィリアム・ウォーターハウス、1891年）はラファエル前派、もしくはその影響を受けた画家たちによる作品だ。取り上げられている女性たちはいずれも神話において、恐ろしい悪女として設定されてきたが、ここでは美しく、妖艶に描かれている。本展の作品では、2章-1のダンテ・ガブリエル・ロセッティの『マドンナ・ピエトラ』（1874年）やアルフォンス・ミュシャの『ジスモンダ』（1894年）、エドワード・バーン＝ジョーンズの『フラワーブック』（1905年）、2章-3のオーブリー・ヴィンセント・ピアズリーの『サロメ』の挿絵『舞姫の得たるかづけもの（踊り手への褒美）』（1910年）などが当てはまる。

さて、女性画家の手による作品も含まれるものの、これらは基本的には男性目線の女性像だ。評論家の海野弘によれば、ファム・ファタルのイメージは、19世紀末に社会進出してきた女性に対する男性のおびえから生まれ

だが、魔女狩りの時代のように女性を邪悪だとして否定するのではなく、魅惑の存在となった[海野 2014: 71-72]。つまり、ファム・ファタルはかつての魔女から邪悪さを取り除いた女性像だともいえるのではないか。描かれた女性たちを眺めていると、美しく、妖しげであると同時に、力強さも感じる。それは、19世紀末から20世紀初めにかけての女性の参政権を求める第一次フェミニズムなど、主体的に生きていこうとする強い女性を表していたのかもしれない。

ファム・ファタル像の影響を受けた、明治から大正にかけての日本の「あやしい絵」の中にもそういう雰囲気醸し出している女性たちが描かれている。安珍・清姫伝説⁴⁾を主題とした『清姫』(木村斯光、大正末期)は、恨みのこもった冷たい目をしている。しかし口元は不気味に笑っており、また、襟元の蛇模様と着物の裾の竜の絵柄からは、これから安珍を追いかけるために蛇に変身しようと、覚悟を決めているようにも見える。『刺青』(橘小夢、1923年/1934年)は、谷崎潤一郎の小説『刺青』⁵⁾(1910年)を題材にした作品なのだが、伏している少女には、背中から抱きついていくかのように、足と体の毛までが細かく表現された巨大な女郎蜘蛛がリアルに刺られている。顔の表情は見えないが、ぞっとするほど気味が悪い女郎蜘蛛に憑りつかれているというより、彼女自身が女郎蜘蛛に乗り移ったかのようだ。

どちらの女性も、男性に心を、あるいは身体を傷つけられている。しかし、泣き寝入りすることなく、立ち上がったか、自らの糧としたりしている。社会の複雑な絡まりあいから頭一つ抜け出て、せせら笑っているかのようだ。

この2人だけではなく、ほかの多くの作品の着物を着た彼女たちを見ていると悲しくなってくる。その生き方がどこか破滅的で、幸福を感じられる未来が待っているようには思えないからだ。西洋で描かれたファム・ファ

タルたちに感じるような人間離れした力強さより、自覚的に身を滅ぼしていくような儚さの方が、要素として強いような気がする。

当時の作家たちは、西洋のファム・ファタル像に影響を受けたといっても、その成り立ちの社会的背景まで理解して受容したわけではなかったらしい(本展の図録中のコラム129ページ)。そうであるならば、「あやしい」とは、どこか破滅的な儚さと美しさを兼ね備えた、日本の「ファム・ファタル」たちへの形容詞なのかもしれない。

4 3つの「あやしき」

実は本展のタイトルは、作品がリストアップされてからつけられている。つまり、「あやしい絵」を集めたのではなく、「幕末から昭和初期の退廃的、妖艶、奇怪、神秘的、不可思議といった要素をもつ、単に美しいだけではないものたち」をまとめる、短い言葉として「あやしい」が選ばれたとある[中村 2021: 23]。

作品の大半が「妖しい」、つまり艶めかしく、蠱惑的な女性たちであることは間違いない。しかし彼女たちは同時に、信用してもよいのか不安にさせるような表情やポーズをとっている。「怪しんで」しまうのである。もちろん、当時(もしかしたら現代も)、あまりいない「奇しい」人(奇人)でもあっただろう。艶めかしいだけではなく危うげで道から外れた人々を描いた絵。怪しく、妖しく、奇しいのであり、この3つの「アヤシイ」を併せ持つということで、平仮名の「あやしい」となったのかもしれない。

日本のあやしげなファム・ファタルたち、すなわち魔女たちは、アニメの中によく登場する。それだけではなく、絵画の中にも日本の魔女たちは見つかるのかもしれない。

<注>

1) 5月16日(日)まで開催予定だったが、

東京都に発令された緊急事態宣言と政府からの要請を受け、会場が臨時休館となったため、終了が早まった。

2) 以下の漢字の説明は、『新漢語林（第2版）』の電子辞書版を参考にした。

3) 2012年4月13日(金)～6月24日(日)、愛知県美術館。その後、岐阜県美術館と三重県立美術館を巡回。

4) 平安時代の仏教説話集『大日本国法華経験記』に原型が確認されている伝承。一晚、宿を借りた僧の安珍は、その家の娘の清姫に気に入られる。熊野詣の帰りに立ち寄るという約束を破った安珍に怒った清姫は、蛇に姿を変えて、道成寺の鐘の中に隠れていた安珍を焼き殺す。

5) 美しい女性に刺青を施したいと夢見ていた刺青師の男性は、ある日出会った美少女に美しさと男性を破滅に導く魔性を見出す。彼

女を薬で眠らせ、背中に女郎蜘蛛を刺り込んだ。目を覚ました彼女は、その魔性を花開かせていった。

<参考文献>

海野弘 2014『魔女の世界史——女神信仰からアニメまで』朝日新聞出版。

鎌田正・米山寅太郎 2011『新漢語林（第2版）』大修館書店。

中村史子・中西園子 2012『魔術／美術——幻視の技術と内なる異界』愛知県美術館。

中村麗子 2021「「あやしい絵」通史」中村麗子・山田歩・廣瀬歩・三宅さくら編『あやしい絵展 [図録]』毎日新聞社、pp. 23-33。

中村麗子・山田歩・廣瀬歩・三宅さくら編 2021『あやしい絵展 [図録]』毎日新聞社。

著者不明 2021「コラム——なぜ「あやしい絵」には女性が多く登場するのか？」中村麗子・山田歩・廣瀬歩・三宅さくら編『あやしい絵展 [図録]』毎日新聞社、pp. 128-129。